

二〇二一年度 卒業論文

浄土真宗における奇瑞について

コピー厳禁

L
1
8
0
0
6
6
近藤 あかね

目次

序論	1
本論	1
第一章 親鸞における奇瑞	1
第一節 親鸞以前の信仰	1
第二節 親鸞の著書に記された奇瑞	4
第三節 現生正定聚と「恵信尼消息」	7
第四節 親鸞の意図	8
第二章 親鸞を描いた奇瑞	10
第一節 『御伝鈔』	10
第二節 『親鸞聖人霊瑞編』	14
第一項 『高田開山親鸞聖人正統伝』	15
第二項 越後の七不思議	1
第三章 真宗の奇瑞	3
結論	4
註	

コピー厳禁

コピー厳禁

序論

奥田桂寛先生が開講されていた「伝道学特殊講義」にて『浄土異聞録』という真宗の奇瑞を集めた史料に触れた。真宗の理論に加え、歴史学も包摂するテーマであり、大変興味深い内容であった。そこで、本論文では真宗における奇瑞について取り上げたい。

奇瑞とは、めでたい事の不思議なしるし、また不思議な出来事のことである。祥瑞や靈瑞、吉兆ともいう。数多くの史料にて確認できる紫雲や異香、音楽などが奇瑞として挙げられる代表的な現象である。

浄土真宗において、奇瑞の多くは架空の話として扱われ、理論的な教義教学とは相反するものとして重要視されることがなかった。しかし、親鸞の著作である『高僧和讃』『西方指南抄』には奇瑞の記述がみられる。また、種々の親鸞伝にも奇瑞が複数確認できる。そこで、実際に著された奇瑞を確認し、こういった意図をもって記されたのかについて考えたい。

本論

第一章 親鸞における奇瑞

第一節 親鸞以前の信仰

コピ

主題である浄土真宗における奇瑞を論じる前に、親鸞以前の一般的な信仰を確認することで、親鸞がどのような時代に生きていたのかを確認し、それらを参考にして親鸞の意図についてみていきたい。

親鸞は、平安時代後期承安三年（一一七三）、京都にて生まれ、鎌倉時代前期弘長二年（一二六二）にその生涯を終えた。その時代は、まさに呪術信仰の全盛期であり、民衆から貴族まで幅広い層に浸透していた。「平安時代中期から鎌倉時代前期にかけての史料には、物気や鬼、天狗、怨霊などについての記述を多く見出すことができる」⁽¹⁾ことから当時の俗信がうかがえる。物気などといった存在が人間に病気や災厄をもたらすとされ、恐れられていた。そこで、貴族社会においては、僧侶や陰陽師が祈祷や加持、占いなどを用いて、祓いや病気治療の役割を担っていた。そういった現世利益を求める思想が当然とされていた時代が、平安期浄土教の根底にある。

さらに特筆すべき出来事として、寛和元年（九八五）に天台宗の僧であった源信によって『往生要集』が著されたことが挙げられる。『往生要集』とはいわば極楽往生の方法が記された書である。極楽往生の方法、すなわち臨終行儀が示され、後世の臨終の在り方に大きな影響を及ぼした。念仏には二種類あるとして、一つは観想念仏で、平生に行う念仏であるとされた。もう一つは、称名念仏である。源信は、臨終時に観想念仏を行うのは大変困難であるために、称名念仏を行うことが重要であり、臨終時に心を乱すことなく、正念に念仏を称えることで極楽往生を果たすことができると示した。さらに、源信は横川の僧侶二十五人で二十五三昧会を結成し、互いに極楽往生を果たすための助け合いを行った。『楞嚴院二十五三昧結衆過去帳』には、二十五三昧会に集った念

仏者たちの臨終時の様子が描かれている。過去帳から、住居の掃除を行い、身体を清めること、仏像の手に付けた五色の糸を横たわった状態で手に取ることなどの臨終行儀が実際に行われていたことが明らかになっている。

ところで、源信が『往生要集』を著した理由として、末法の時代が近づいているという強い危機意識があったと考えられている。その意識は、貴族や民衆にまで浸透し、極楽往生への強い関心、そして不安が広がった。人々は、源信が示した臨終行儀、そして、当時次々と書かれた往生伝を指針として、不安に対応したのである。当時書かれた往生伝というのが、『往生要集』と同時期に著された『日本往生極楽記』や、以降の『続本朝往生伝』『拾遺往生伝』『後拾遺往生伝』『三外往生記』『本朝新修往生伝』などである。そして、これら往生伝において、臨終行儀はさることながら臨終時についての記述が詳細に残されている。つまり、臨終時のあり方が最もとってよいほど重要視された。さらに、歴史学者の西口順子氏によると、六つの往生伝の臨終時の記録を整理したところ、他の臨終行儀や善知識に遭うといったことよりも、奇瑞や没後の夢告の記述がとくに多かったのである。人々は臨終時にあらわれた奇瑞を見て、往生を確信した。すなわち、奇瑞や夢告といったことが極楽往生の証とされていたのである。西口氏は「奇瑞・夢告が決定往生のしるしとされたのは、それらが死後の世界を知るただ一つのこされた手がかりであったにちがいない」としている。奇瑞とは、空にたなびく紫雲や音楽、異香といった現象があげられるが、そのほとんどが五感をもってわかりやすく知覚できるものである。唯一かつ誰にでもわかりやすく理解できることから、奇瑞が往生の証として機能し、ひろく信じられるところとなった。

第二節 親鸞の著書に記された奇瑞

では、親鸞は奇瑞をどのように捉えていたのだろうか。論じるために、まず親鸞が自らの著書に記した奇瑞、すなわち親鸞が認めた奇瑞を取り上げたい。一つが『高僧和讃』に収められた和讃である。『高僧和讃』は、三帖和讃の一つで、七高僧と呼ばれる龍樹菩薩・天親菩薩・曇鸞大師・道綽禪師・善導大師・源信和尚・源空聖人の「七人の浄土教の先達の教えを、その事蹟や著作に即してわかりやすく讃嘆」（『註釈版』五五四頁）したものである。そのうち、曇鸞・法然を讃嘆する詩に、奇瑞の記述がみられる。順にみていきたい。

まず、曇鸞の和讃を取り上げる。以下の和讃は曇鸞の和讃全三十四首のうち一首で、九番目の詩である。

六十有七ときいたり 浄土の往生とげたまふ そのとき靈瑞不思議にて 一切道俗帰敬しき（『註釈版』五

八三頁）

臨終が近くなった曇鸞は、魏の興和四年には平遥山の遥山寺に移った。そして、六十七歳をむかえた年に、いよいよ素懷を遂げた。その際に奇瑞があらわれたのである。香氣や音楽、さらには遥山寺西方五里の尼寺にて空中に來迎と還浄の音楽が聞こえたとされる。⁽³⁾様々な奇瑞に、僧侶・俗人問わず多くの門徒がさらに敬いの心を増したのである。

次に法然の和讃について。全二十首のうち三首に奇瑞の記述がみられる。

源空存在せしときに 金色の光明はなたしむ 禅定博陸まのあたり 拝見せしめたまひけり（『註釈版』五

九六頁）

法然は、在世中に時折その身体から金色の光明を放っていたという。禪定とは仏門に入った人のことで、博陸とは摂政関白のことである。ここでは藤原兼実を指している。光を放つ法然の姿を見た兼実は敬慕の思いがさらに強まった。

源空光明はなたしめ 門徒つねにみせしめき 賢哲・愚夫もえらばれず 豪貴・鄙賤もへだてなし（『註釈版』五九七頁）

前述の和讃と同様に、法然は時折その身体から光明を放っていた。賢いもの、愚かなもの、高貴な人や賤しいもの、それらの区別なく帰依するものすべてが徳高い光明を目にして法然を敬った。

本師源空のをはりには 光明紫雲のごとくなり 音楽哀婉雅亮にて 異香みぎりに映芳す（『註釈版』五九八頁）

法然の臨終の際にも、様々な奇瑞があらわれた。空に紫の雲のような光明が輝き、心にしみて浄らかな感動にみたさせる音色が響いていた。さらに、法然の周囲には浄らかな香りは満ちていた。『高僧和讃』にみられる奇瑞の記述は以上の四首である。

次に、『西方指南抄』の記述を確認したい。『西方指南抄』は、親鸞が晩年の頃に編述した法然の遺文録である。「源空聖人私日記」に「長承二年（癸丑）聖人始出胎内之時、兩幡自天而降。奇異之瑞相也。權化之再誕也。見者合掌、聞者驚耳（云云）。」（『聖典全書』第三卷九五九頁）と法然誕生時の奇瑞が記されている。内容は、長承二年（一一三三）、法然が母親の胎内から誕生した時に、二本の旗が天から降ってきたといったものである。

加えて、中巻本に法然臨終時の様子が書かれている。

又同廿日巳時に、大谷の房の上にあたりて、あやしき雲、西東へなおくたなびきて侍中に、ながさ五六丈ばかりして、その中にまるなるかたちありけり。そのいろ五色にして、まことにいるあざやかにして、光ありけり。たとへば、繪像の佛の圓光のごとくに侍けり。みちをすぎゆく人々、あまたところにて、みあやしみておがみ侍けり。

又同日午時ばかりに、ある御弟子申ていふやう、この上に紫雲たなびけり、聖人の往生の時ちかづかせたまひて侍かと申ければ、聖人のたまはく、あはれなる事かなと（中略）

又同廿三日にも紫雲たなびきて侍よし、ほのかにきこえけるに、同廿五日むまの時に、また紫雲おほきになびきて、西の山の水の尾のみねにみえわたりけるを、樵夫ども十餘人ばかりみたりけるが、その中に一人まいりて、このよしくわしく申ければ、かのまさしき臨終の午の時にぞあたりける。またうづまさにまいりて下向しけるあまも、この紫雲おほがみて、いそぎまいりてつげ申侍ける。（『聖典全書』第三卷九四〇

〜九四二頁）

建曆二年（一一二二）正月二十日巳の時（午前十時頃）、大谷の房の上に不思議な雲がまっすぐたなびいてる中に長さ五六丈ほどの丸い形のものがあった。その色は五色で、色鮮やかで輝いている。繪像の仏の円光のようであった。同日の午の時には、房の上に紫雲がたなびいているのを弟子が確認している。また、同月二十三日

に紫雲がたなびき、さらに二十五日午の時に、また紫雲が大きくたなびいているのを木こりたち十余人が見ている。太秦に参りに来ていた尼も紫雲を見ており、この紫雲がたなびいていた同時刻法然は臨終を迎えたという。

第三節 現生正定聚と「恵信尼消息」

以上のように、親鸞は自らの著書において奇瑞を記している。しかし、西口順子氏によると、法然や親鸞、一遍の登場によって往生の証としての奇瑞が不必要になったと指摘されている。なぜなら、法然・親鸞の教義によって往生のきめては「信」となり、さらに一遍は「信不信とわず」といって、信心を持たないひとでさえ救済の対象であると示した。中世に往生伝の類がほとんど書かれていないことが根拠である。(4)さらに、親鸞の教義の要の一つである「現生正定聚」と往生の証としての奇瑞は矛盾しかねない。親鸞は師である法然と同じく、臨終行儀を否定した。その理由の一つとして、現生正定聚が挙げられる。正定聚とは、「間違いなくさとりに至る身となり、もはやさとりから退転しないもの（「聚」は「集まり・仲間」の意）」（5）のことで、今生きている現生において信を得ることができたならば、その時点で正定聚の位につく。これが現生正定聚の意である。そして、正定聚につくことができれば、臨終来迎を頼む必要もなく、奇瑞を願う必要がないのである。

また、親鸞の現生正定聚の教えがあらわれているのが「恵信尼消息」である。親鸞の妻である恵信尼が娘の覚信尼に宛てた手紙とされる。覚信尼は、親鸞の臨終をその場で看取ったが、その際に奇瑞が起こらなかったことに不安を覚えた。それに対し、恵信尼は「されば御りんずはいかにもわたらせたまへ、疑ひ思ひまゐらせぬうへ、

おなじことながら」(『註釈版』八一三頁)と消息に記した。臨終がどのようなものであったとしても、聖人の浄土往生は疑いなく、それが変わることはないということである。(6)つまり、臨終時に奇瑞が現れなかったとしても、浄土往生の可否に不安を覚えることはない⁽⁷⁾と示した。この恵信尼の消息は、親鸞が説いた現生正定聚の内容と一致する。

第四節 親鸞の意図

親鸞は「現生正定聚」の教えを説き、信心が定まったときに往生が決定しているのだから、臨終時に来迎を願う事はないのだとした。むしろ臨終来迎を期待することは自力への執着を捨てきれないことのあらわれであると否定した。では、親鸞の著作に臨終来迎の証とも言える奇瑞が著されていることはどのような意図があるのだろうか。

その理由の一つに、善導と法然が三昧発得を体験した高僧であることがあげられる。三昧発得とは、心を一点に集中させた深い静寂の状態(禅定)において正しい智慧が生じ仏などの勝れた境地を感見すること。また、「仏及び仏界を現身に見る体験」(7)を指している。法然はこの三昧発得を体験している。『西方指南抄』「源空聖人日記」には以下の出来事が残されている。

夢のお告げを示す紫雲が広くなびいて、日本国全体を覆った。雲の中から無量の光が出ていた。光の中から百の宝の色を持った鳥が飛び出して、虚空に充満した。その時に高山に登ると、直ちに生身の善導大師を拝むこ

とができた。善導は腰から下は金色で、腰から上は常人と同じであった。善導は言った。「お前は愚か者だとは言え、念仏を一天のもとに広めている。称名専修を衆生に広げるために私はここに来たのだ。善導はすなわち私である。これによつて、専修念仏の法を広めよ。念仏は年々次第に繁盛し、念仏の流布しないところはなくなるであろう」と。(8)さらに、臨終時においても法然の目には仏が見えていたという。「法然上人臨終行儀」に次のように親鸞は記している。

またある時、弟子どもにかたりてのたまはく、観音・勢至菩薩、聖衆まへに現じたまふおぼ、なむだち、おがみたてまつるやとのたまふに、弟子等えみたてまつらずと申けり。またそのち臨終のれうにて、三尺の彌陀の像をすゑたてまつりて、弟子等申やう、この御佛をおがみまいらせたまふべしと申侍ければ、聖人のたまはく、この佛のほかにもたまたま佛おはしますかとて、ゆびをもてむなしきところをさしたまひけり。按内をしらぬ人は、この事をこゝろえず侍。しかるあひだ、いさゝか由緒をしるし侍なり。凡この十餘年より、念佛の功つもりて極樂のありさまをみたてまつり、佛・菩薩の御すがたを、つねにみまいらせたまひけり。しかりといゑども、御意ばかりにしりて、人にかたりたまはず侍あひだ、いきたまへるほどは、よの人ゆめゆめしり侍ず。おほかた眞身の佛をみたてまつりたまひけること、つねにぞ侍ける。(『聖典全書』第三卷九

三九〇頁)

弟子がいるなか法然のみが観音菩薩・勢至菩薩やほかの浄土の聖衆が見えていたのである。さらに、法然には以前から仏・菩薩の姿が見えていたという。

また、法然は『選択集』にて善導が三昧発得の人であったことを記している。法然がひとえに善導の教えに依っていたことは親鸞も当然知るところであっただろう。仏を見ることは、煩惱にまみれた凡夫では決して自力では果たすことができない。実際に親鸞でさえも三昧発得を体験していない。であるからこそ、法然やその他高僧に対する尊敬の念は高まるばかりであった。

さらに、哲学者で浄土真宗の僧侶であった大峯顕氏著『高僧和讃を読む』に次のようなことが書かれている。伝記によりますと、法然上人は生きておられるときからすでに仏さまの生まれ変わりだと思われていたのです。(中略)地獄の中からこの自分を救い出す一筋の真実の道を教えて下さった方だという深い宗教体験の上から、お浄土から来られた方だと実感されたのです。(六一〜六四頁)

つまり、法然は仏・菩薩の化身であるために、その身に奇瑞など不思議な出来事が起こることに何らおかしい点はなく、親鸞が著作に記すことには讃嘆の意図が込められていたのではないかと考える。

第二章 親鸞を描いた奇瑞

第一節 『御伝鈔』

第二章では、親鸞を主題に記された奇瑞を取り上げたい。親鸞の伝記は、中世の時代からすでにえがかれるようになった。代表的な伝記が『御伝鈔』である。『御伝鈔』は元来『本願寺聖人親鸞伝絵』という図絵と詞書が

ともに記された絵巻物であった。写伝の過程で図絵と詞書とを分けて書かれるようになり、その詞書のみが記されたのが『御伝鈔』である。現代までに多くの親鸞伝記が残されているが、『御伝鈔』は本願寺公認の親鸞伝であり、史実性の是非はさておき、今日まで親鸞伝記としての地位を確立している。『御伝鈔』では、夢といったかたちで不思議な出来事が多く描かれている。本文中に描かれた夢の内容を順にみていきたい。

まずは、最も代表的な夢告の一つとして知られる「六角堂夢告」が上巻第三段にみられる。ある夜、六角堂にて参籠を続けていた親鸞は夢告を受けた。

六角堂の救世菩薩、（中略）善信（親鸞）に告命してのたまはく、「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴臨終引導生極楽」といへり。救世菩薩、善信にのたまはく、「これはこれ、わが誓願なり。善信この誓願の旨趣を宣説して、一切群生にきかしむべし」と云々。（『註釈版』一〇四四〜一〇四五頁）

救世菩薩とは聖徳太子の本地である。太子が親鸞の夢に現れ、誓願を告げた。太子の夢告は、親鸞を法然の下へと導く縁になったともされている。

同巻第四段は「蓮位夢想」と称される。親鸞の高弟である蓮位に夢告があった。その夢の中で、聖徳太子が親鸞に拝礼し、親鸞が阿弥陀仏の化身であることを告げた。

第五段においても、「夢の告げによりて、綽空の字を改めて」（『註釈版』一〇四七頁）と書かれており、夢告を様々なきっかけとしたことがうかがえる。

第八段には、定禅という絵師の見た夢について書かれている。親鸞の弟子である入西房が親鸞の絵像を写したいと日頃考えていたところ、親鸞本人が「定禅に描かせてはどうか」とすすめた。入西によって招かれた定禅が、親鸞の顔を見て、昨晚の夢に出てきた尊い僧の尊顔と一分も違わないと言った。また、夢の中で拝見した僧はまるで生きた姿の阿弥陀仏のようであったと語った。このことから、「聖人（親鸞）、弥陀如来の来現といふこと炳焉なり」と後述されている。すなわち、親鸞が阿弥陀仏の化身としてこの世に現れた方であると解釈されたのである。

下巻にも夢告がみられる。流罪を経た後、関東から京都へ向かう様子が第四段で記されている。道中に訪ねた人家に高齢の老人が住んでいた。立派な装束を身につけており、箱根権現をまつる社にて神楽を勤めているらしい。そして今しがた見た夢について語った。「権現仰せられてはく、へただいまわれ尊敬をいたすべき客人、この路を過ぎたまふべきことあり、かならず慰懃の忠節を抽んでことに丁寧の饗応をまうくべし」と云々。」（『註釈版』一〇五六頁）夢に権現が現れ、敬うべき客人が来るため礼を尽くしもてなすようお告げがあった。そして間もないうちに親鸞が訪ねてきたのである。老人はお告げの通り親鸞をあつくもてなした。

第五段では、親鸞の門弟である平太郎が熊野参詣に向かい、熊野に到着したその日の夜に見た夢が記されている。

夢に告げていはく、証誠殿の扉を排きて、衣冠ただしき俗人仰せられていはく、「なんぢなんぞわれを惣諸して汚穢不浄にして参詣するや」と。その時かの俗人に対座して、聖人忽爾としてまみえたまふ。その詞に

のたまはく、「かれは善信（親鸞）の訓によりて念仏するものなり」と云々。ここに俗人笏をただしくして、ことに敬屈の礼を著しつつ、かさねて述ぶることなしとみるほどに、夢さめをはりぬ。（『註釈版』一〇五八〜一〇五九頁）

平太郎は熊野参詣の是非を親鸞に尋ねた際にいただいた神祇不拝の教えに従い、心身をあらたまつて清めることをせず熊野に赴いた。夢に現れた身なりの良い男に、そのことについて咎められたが、親鸞もまた夢に現れその男に向き合った。親鸞は、平太郎が自身の門弟であり、教えに従って念仏をしていることを告げた。すると、男は居住まいをただし、親鸞に敬服した。以上のように、『御伝鈔』には多くの夢告が残されている。

ところで、親鸞没後には種々の親鸞伝が誕生している。『御伝鈔』をはじめとして、親鸞の遠忌法要に際してえがかれた親鸞伝が多数存在し、近世には、後に取り上げる『親鸞聖人正統伝』が著された。伝記には多様な親鸞像があらわれている。まずは、『御伝鈔』における親鸞像をみていきたい。上巻第四段「蓮位夢想」では、蓮位の夢告の内容から親鸞が阿弥陀仏の化身であることが示されている。また上巻第八段においても入西房の夢告から同様のことが示されている。つまり、覚如の記した親鸞伝には阿弥陀仏の化身としての親鸞像がえがかれている。清基秀紀氏は「真宗の土着（六）真宗における仏と師」（『印度學佛教学研究四十四卷第二号』）において以下のように指摘している。

真宗における師弟関係が「御同朋、御同行」として普遍的論理を持つ一方で、親鸞を宗祖とする教団が形成されてゆくと、師を仏菩薩の化身と見て神格化するという論理が、個人の宗教体験から離れて、伝記のなかで一般化されるようになった。(二〇六頁)

祖師である親鸞を神格化して語ることは、すでに『御伝鈔』が書かれた中世から始まっていたのである。『御伝鈔』の内容のほとんどは親鸞を称え尊ぶものであり、著者である覚如の意図がうかがえる。しかし、夢告が多く描かれる一方で、臨終の際の奇瑞は書かれていない。その背景には、覚如が示した「平生業成」の理論があげられる。覚如は親鸞の現生正定聚を継ぐ教えとして平生業成を示した。平生業成とは、臨終時の一念などの自力による臨終来迎に対する言葉で、平生に往生が決定することである。前述した通り、奇瑞は往生の証として機能していた。覚如は平生業成の意を確かに伝えるために、臨終時の奇瑞をえがくことをしなかったのではないかと考えられる。

第二節 『親鸞聖人霊瑞編』

夢告だけでなく、親鸞出生時に起きた不思議な出来事や、親鸞が各地で起こしたとされる出来事が伝説として伝えられている。そのような親鸞の伝説を集めたのが『親鸞聖人霊瑞編』である。江戸時代後期の西本願寺教団の学僧で、専精寺第二十一代住職であった正聚房僧純が編述し、文久元年(一八六一)親鸞聖人六百回忌の際に発行された。この時に発行されたのは一巻本であったが、僧純没後に、亡くなるまで収集していた伝説を同寺二

十三代目住職の中山令純が補刻し、上下二巻本として版行された。『親鸞聖人霊瑞編』には、同じく僧純が編纂した『妙好人伝』や第一節で取り上げた『御伝鈔』『親鸞聖人正明伝』『高田開山親鸞聖人正統伝』など様々な親鸞伝に収められた話、そして僧純が各地を巡り自ら見聞き、記録した伝説が記されている。

本節では、『霊瑞編』に収められている、『高田開山親鸞聖人正統伝』から採った説話と「越後の七不思議」を取り上げ、僧純の加えた説話を参考にして、奇瑞の意図を見ていきたい。

第一項 『高田開山親鸞聖人正統伝』

『高田開山親鸞聖人正統伝』（以下『正統伝』）は高田派の学僧である五天良空が著した。「真仏と顕智が著したという「本伝」を中心として、信順の「下野伝」、「正中記」、「至徳記」、「五代記」、存覚の「四巻伝」（正明伝に同じ）など、下野の高田専修寺宝庫に伝来したと称する史料を用いて編集したもので、親鸞の年齢によって、編年体に整理して記述」⁽⁹⁾されている。『正統伝』は、高田派が親鸞の正統な後継であることを示そうという意図が込められた親鸞伝であると一般的に指摘されている。

また、清基秀紀氏「真宗の土着（三）」において、親鸞伝の以下のような特徴が示されている。

親鸞伝を構成する説話には、あきらかに編者の意図が見える。（中略）親鸞の神格化が考えられる。宗派の祖師を神秘的な奇瑞や霊験の説話で超人的な能力を持つ人格として著すことは他にもよく見られる。また、

土俗的な民間信仰がとり入れられていることは、親鸞伝が土着を意識したものであったと考えられる（六一三頁）

この指摘の通り、『正統伝』においても「親鸞の神格化」、そして「土俗的な民間信仰」が取り入れられた話が確認できる。特に神格化については、『御伝鈔』と比べてより強調されていることがうかがえる。

はじめに、親鸞の入胎についての話は以下のよう¹に書かれている。

御母吉光女、つねに菩提心ふかし。或夜、しきりに浮世の無常を觀じ、西首して臥したまう。其夜の夢に、西方より金色の光明かがやき来り、身を遶ること三匝して、口中に入ること箭の如し。夢中に驚て西方に向い給えば、一の菩薩ましまし、長一尺許の五葉の松一本を持ち、これを授て言わく、吾は如意輪也。汝奇異の児を生せん、必ず是を以て名とすべしと云云。夢さめて、不思議の思いをなし、明旦有範卿、禁裏より退出を待て此事を語り給う。有範卿、しばらく案じて曰く、昔し菅丞相は身上に松生ずと夢みて、横難に逢いたまえり。然ども、君が夢は必ず祥瑞ならん。但し恨らくは奇子を生ずとも僧徒となりて、我家は継ぐべからずと。是より始て、吉光女有身したまう。抑金色光明の来応は、是聖人は、即西方弥陀如来の化身にてまします徴なり。又思うに、五葉松は、若聖人の法流五家に則るること有んか、件の瑞夢は承安二年壬辰五月二日の夜半也。（『親鸞伝叢書』一二五頁）

親鸞の母とされる吉光女の夢に五つ葉の松を持った如意輪観音が現れた。夫である日野有範に夢について話すと、有範は過去の偉人の松にまつわる夢告を例にして、その夢が吉夢であろうと喜んだ。証明されるかのごとく

その後親鸞が誕生した。金色の光明が西から来たこと、これは親鸞が阿弥陀の化身である証である。僧純は、聖徳太子が金色の僧となって母親の胎内に入ったことや、法然上人の母がかみそりを呑む夢を見た後に懐妊したことなどを例に挙げて、聖者の入胎には奇瑞の前触れがあるのだと示している。また、松についても枯れることなく常に緑である特徴を挙げ、阿弥陀の本願が盛んであることと結びつけている。

続いて、親鸞誕生から幼年の奇瑞について。

御誕生は、人皇八十代高倉院御宇承安三年癸巳四月朔日也。十有二箇月に至て、出胎まします。(中略)当年十一月より。能起居起歩行したまう。是亦奇異のことなり。(中略)

生年二歳、秋の半に、御父有範卿の膝上にましまして、六字の宝号を唱えたまうこと二声、これ御初言のはじめなり。其声あざやかにして、壯人の如し。是より能くものを言えり。亦かりそめの御たわぶれにも、念珠をもてあそび、経巻を取て拝し、仏号を唱えたまう癖あり。三歳の御時も、大凡かくの如し。(『親鸞伝叢書』一二六―一二七頁)

親鸞は誕生したその年にはすでに起き上がって歩くことができた。しかし、少しも言葉を発することがなく周りの者はみな心配していた。ところが、二歳になった秋、父親の膝に座っていた親鸞が手を合わせ「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と称えたのである。その後も経巻を手に取って拝し、念仏を称える癖があったという。『靈瑞編』では、聖徳太子も二歳を迎えた時分、初めて「南無仏 南無仏」と称えたこと、そして、これら幼年の親

鸞の行動から「権化の御再誕（仏が衆生を救済するために、仮に姿を変えてこの世に現れられた）であることは明らかである」⁽¹⁰⁾と讃嘆している。

そして、親鸞十九歳のこと、「十九歳初秋、（中略）同年九月十二日、河州石川郡東条磯長聖徳太子の御廟へ参詣しましたし、十三日より十五日まで三日御参籠なり。第二の夜夢想を蒙りたまう」（『親鸞伝叢書』一三三頁）とあり、河内国の聖徳太子の霊廟へと参詣し、三日三晩参籠したことが記されている。

以上の三つの話は『御伝鈔』には見られない。親鸞の幼少期は詳細には明かされておらず、『正統伝』のこの記録は史実性の観点から見れば、疑うべき部分が多いとされる。

続いて、親鸞が越後に流罪となったのちの話である。

四十三歳、四月の比、下野国都賀郡総社町室八島の神官、大沢掃部友宗と云う者、聖人に使を奉りて申さく、僕近き所に九尋無底の沢あり。昔より春秋の二時、祭をいたす。若し祭礼おろそかなれば、沢の神出て災害はなほだし、僕聞く、尊師の徳光照さずと云う所なしと。然るに、今老朽の身自走て真容を動すに力なし。伏て乞う、駕を回らし、法雨をそそぎたまわば現当の利益これに如くべからずと。聖人きこしめし、是一化の幸なりとて、即ち領状ましまして、明日やがて彼地にきたまう。友宗、己が宅より二十町ばかり東に出迎え、屈敬尊重す。聖人のたまわく、彼沢地いづくにあるや。友宗申さく、是所に侍るなりとて、聖人を延きて小き丘にのぼるに、件の池あり。聖人ここに座を設けさせ、三日夜誦経説法したまうに、地水忽ちに涌きかえり。浪間よりひとりの女人出でたり。友宗を始として、諸人驚嘆す。婦人聖人を礼し、涕泣して云く、われ

は前世富家の妻にて侍りき。嫉妬ふかくして婢妾を殺し、造悪はなはだ多し。其瞋恚の報に依て、今大蛇の身を受けたり。瞋火身を焼きて、苦痛たとえを取るに物なし。然るに、日者尊師の法雨我身にそそぎ、三熱の焰やや消えぬ。願くは、師の法力いま三日を累らわさば、我天にのぼり、妙華を雨して、真座を供養せんと、聖人諾いたまう。後二日に至りて、風おもむろに吹きて、地中より雲立ちのぼる中に件の女人あり、忽ちに菩提身を現じ、宝冠を傾け、聖人を礼し、雲に乗じて去る。遽に天華ふり、異香たぐいなし。地に下れば、唯雨となる。見者、歎異せずと云うことなし。其より此地を呼んで、華見岡と云う。亦彼沢地を親鸞地と名く。(『親鸞伝叢書』一九五〇一九六頁)

この話は『靈瑞編』にて「大蛇御済度」と題される。下野国にて池に昔からいるというぬし神を村人は大変おそれていて、そのぬし神の済度を親鸞に頼み込んだ。親鸞が池の堤で、三日三晩経を読み、法話を行うと、不思議なことに池の中から婦人が現れた。自らの煩惱によって命終えた時に毒蛇となってしまうという。その婦人の願いで、親鸞がさらに経を読み教え導くと、婦人の身は菩薩へと転じ、飛び去った。周囲には異香が満ち、空からは花が降っており、人々はその奇瑞に感嘆していた。

続いて、「悪八郎済度」という話があり、親鸞四十八歳のことである。

四十八歳の秋八月、聖人鹿島の辺御教勸の時、鳥巢の里に寺あり、寺中の墓より毎夜女鬼出でて人を悩しけり。寺僧、法力を尽せども験なし。すなわち聖人の許に参りて申さく、しかしかの事侍りぬ。是はそののみ悪八郎将監とて、不敵の山賊あり。一時同朋の為に殺されたり。彼者の墓なり。今に至るまで四十余年

かかる妨げを致して、寺院も既に魔境となれり。師の高徳何ぞ、雨浴を惜まんやと云。聖人きこしめし、經に「化為清冷風」と説けり、五逆の者猶お解脱す。盜殺の業、何ぞ仏力に漏れんやとて、廳へやがへて其処にゆき、東国の習俗なれば、小石を集め、三部の金文を書きて、妖霊が墓所に埋み、五日を期して誦經念仏したまえり。満夜に及んで、墓の中に妙声有りて云く、僕すでに地獄の火器を出で、安樂の国に往す。是ひとえに、明師の法力による所なり。今より、妖災あるべからずと。聞者、身毛も立ち、是より後、妖鬼永く不出。ここに鹿島祝部尾張守中臣信近、この不思議を聞きて、深く聖人の化導に帰して二心なし。感心の余りに、其子信広を聖人にまいらせて弟子となす。順信房性光是なり。聖人を道綽禪師の後身なりと、夢想を感じたるも此人なり。(『親鸞伝叢書』二〇〇〜二〇一頁)

常陸の国、ある寺の中に一つの墓があつた。昔仲間に殺され埋められた山賊・悪八郎の墓で、そこには毎夜のごとく悪霊が現れた。阿弥陀仏の願力をもつてして盜殺の罪人が救われないはずがないと言って、墓へと赴いた。親鸞はその地の風習に従つて小石を集め、三部の妙典を書いて墓の場所に埋め、さらに誦經念仏をおこなつた。すると、墓の中から声がして、悪霊は地獄から逃れ、浄土に往生したという。

以上二つの逸話は「土俗的な民間信仰」が取り入れられたとみられるものである。加えて、呪術信仰的な面もうかがうことができる。

第二項 越後の七不思議

承元元年（一二〇七）、承元の法難が起こり、親鸞は越後へと流罪となった。越後地域には、親鸞が各地に赴いて教化活動を行っていたことが伝承として語られている。最も有名なものが「越後の七不思議」である。逆竹、三度栗、片葉の葦、繋ぎ榎、数珠掛桜、八房の梅、山田の焼鮎の七つの出来事から構成されている。ここでは、『靈瑞編』に収められた逆竹、八房の梅、三度栗を取り上げたい。第一に、逆竹について。『靈瑞編』においては「倒竹之奇瑞」と題される。内容は以下の通りである。流罪の後、越後にて教化活動を行っていたが、親鸞の教えはなかなか広まることがなかった。そのような状況のなか、親鸞は手に持っていた竹でできた紫色の杖を地面に突き刺して「阿弥陀如来の超世の本願を信ずると、ただちに正定聚の身分の人となり、命終われば無常涅槃のさとりを開くことは、枯れた竹が二度芽を生ずるようなものである」（口）と言った。すると、竹から根芽が生じて枝葉が逆さまに生えたのである。

八房の梅というのは、親鸞が蒲原郡小嶋村の百姓の家に立ち寄った際に、主人が出した梅干しを地面に植え、「他力本願の教えが末の世まで栄えることがあるなら、この実から芽が生じ、八つの実を結ぶだろう」と誓った。すると、その言葉の通りに芽が出て、一つの花に八つの実を結ぶ木となった。さらにその実は梅干しのように塩の味があったという。

三度栗は『靈瑞編』にて「三度栗祥瑞」と題されている。蒲原郡分田の宿を訪れていたとき、一人の女性が、親鸞の教化への感謝に焼いた栗を差し出した。親鸞はその栗を懐に入れて、少し離れた上野が原というところで

口にしました。その時に栗がいくつか草の中へ零れ落ちた。親鸞はその栗を見て「わたしがいま勤める本願が真実であるならば、この焼き栗から芽が出て身を結ぶであろう」と言った。八房の梅の時と同様に、たちまち焼き栗から芽が生じて、一年に三度実を結ぶ大木となった。

では、このような伝説にはどのような意図が込められているのだろうか。それぞれの内容をみると、その話の中には真宗の教えが記されていることがわかる。⁽¹²⁾さらに、話に登場する枯れた竹、梅干し、焼いた栗は、今後絶対に新たな芽を生やすことがない物ばかりである。草野頭之氏は、それらが再び生命を得たように繁茂した、という点と親鸞の法説を信じない者、誇る者が登場する点に注目し、以下のように示している。

『教行信証』の中核をなす信巻で課題とされた、これら「謗大乘」、「五逆罪」（法を誇る者）、「一闡提」（正法を信じず往生の因を持たない者）の救済を、生命のない動植物（仏性のない者）が親鸞の呼びかけによって再び命を得る（救われる）という比喻に托して人々が語り継いだ結果が、鳥屋野の逆さ竹などの七不思議伝承となったものと考えられるのではないだろうか。⁽¹³⁾

そして、『靈瑞編』全体を通して、以下のように結論付けられている。

古くからある神祇信仰や真言密教、修験道などの雑多な信仰、現世利益を求める祈祷や呪術が行われていた状況のなかで、人々に本願念仏の教えを伝えることは容易ではなかったであろう。その困難さが、聖人にまつわる多くの靈瑞伝説を生んだのではなからうか。⁽¹⁴⁾

第三章 真宗の奇瑞

江戸時代になると、一度減少した往生伝が浄土宗を中心に再度頻繁に出版されるようになった。浄土真宗においても往生伝が存在する。本章では、そのひとつである『浄土異聞録』を取り上げ、当時の奇瑞の理解の一つを考えたい。『浄土異聞録』とは、大坂摂津法泉寺の教念が著した『加物語』を、弟子である慈等によって寛政元年（一七八九）に増補、編纂されたもので、副題を『奇瑞物語』という。副題の通り、来迎、見仏、蘇生、夢告などの奇瑞が真宗者を中心に記録されている。

平安期において、末法への危機意識が強まったことや源信の『往生要集』によって臨終行儀が示され、民衆が臨終の在り方や極楽往生について強い関心と不安を抱いていた。その方法を示すかのように多数の往生伝が出版された。中世になって往生伝は減少するが、冒頭で述べた通り、近世になって再度頻繁にみられるようになった。それは近世においても民衆から往生の確信が求められていたことがあらわれている。

奥田桂寛氏「近世真宗伝道における『浄土異聞録』の意義」（『真宗学』第一三四・一四四合併号）において、『浄土異聞録』の序文にて、明春の『近世往生伝』、月筈の「親聞往生験記」の流れを汲む書物であると慈等が記していることから、内容の比較が行われている。その結果、『近世往生伝』と「親聞往生験記」については、篤信者と記載がある人物に奇瑞が記録されている事例が多く、奇瑞と篤信者に高い関連性があることが示されている。一方で、『浄土異聞録』においては、「従来の真宗における往生伝と比べて奇瑞の収録数が非常に多いこと」、「その奇瑞は、真宗の篤信者の記載のある者に生じる事例が全体の半分程度であり、特段記載のない者や、

篤信でない者にも描かれている」ことから、篤信であるという宗教的態度と奇瑞の関連性が高くないと分析されている。そして内容の分析から以下のように結論付けている。

『浄土異聞録』は往生した篤信者と結びつけられてきた奇瑞をあくまでも仏の側に所属する現象とすることで、奇瑞の位置付けを明確にしたといえる。これによって、往生伝を読み奇瑞に触れ求める者に対して、奇瑞の生起について何らはからう必要がないことを示そうとした点に、伝道上の意義を見出すことが出来ると思われる（三四二頁）

つまり、浄土真宗において、奇瑞とは伝道上の意義を持つものでありながら、それによって自らの行いを改めるべきといったような自力につながる教えを説くものではないとされる。実際のところ、真宗教義に沿う意図が往生伝に込められていたとしても、相違なく民衆に伝わっていたかどうかはさだかではない。だが、奇瑞もとい往生の確信を必要とした民衆と、その需要に応じようとした真宗教団の動きがうかがえることは確かである。

結論

以上のように、浄土真宗においても様々な奇瑞が記されてきた。奇瑞という神秘的な現象は、浄土真宗の理論的な教義・教学は矛盾しかねないところにあり、積極的に説かれるものでなかったことは確かであろう。しかし、

種々の伝記に記された奇瑞や親鸞伝説を、史実とかけ離れた架空の話と見過ごすべきではない。そこに込められた意図、背景を探ることで実際の信仰の在り方がそこに見られるのである。さらに、親鸞の持つ信仰や、真宗門徒の伝道の方法、真宗の土着化など、理論的などころだけではない、実際の伝道の様子を垣間見ることが出来るのではないだろうか。

コピー厳禁

- 1 小山聡子『親鸞の信仰と呪術』一一頁
- 2 西口順子「浄土願生者の苦悩」(古典遺産の会『往生伝の研究』一四〇～一四一頁)
- 3 増井悟朗『三帖和讃』講讃 上』一八八頁
- 4 西口順子「浄土願生者の苦悩」(古典遺産の会『往生伝の研究』一五八頁) 参考
- 5 勸学寮『親鸞聖人の教え』二七七頁
- 6 勸学寮『親鸞聖人の教え』三四頁
- 7 杉岡孝紀「法然上人に於ける三昧発得記の体験」(『法然上人研究』第五号四二頁)
- 8 新井俊一『親鸞』『西方指南抄』現代語訳』一七八頁
- 9 平松令三編『真宗史料集成 第七卷 伝記・系図』三〇～三一頁
- 10 菊藤明道『親鸞聖人伝説集』八二頁
- 11 〃 三八～三九頁
- 12 〃 一五六頁
- 13 草野顕之『親鸞の伝記 『御伝鈔』の世界』一八九～一九二頁
- 14 菊藤明道『親鸞聖人伝説集』一五七頁

参考文献

書籍

- ・ 佐々木月樵編『親鸞伝叢書』無我山房、一八七一年
- ・ 高木昭良『三帖和讃の意識と解説』永田文昌堂、一九六六年
- ・ 大峰顕『高僧和讃を読むⅦ 源空上人』六角会館内、一九九七年
- ・ 『日本国語大辞典 第二版』小学館 二〇〇〇年
- ・ 『浄土真宗聖典 註釈版第二版』本願寺出版社、二〇〇四年
- ・ 増井悟朗『『三帖和讃』講讃 上』株式会社白馬社、二〇一〇年
- ・ 菊藤明道『親鸞聖人伝説集』株式会社法蔵館、二〇一一年
- ・ 新井俊一『親鸞『西方指南抄』現代語訳』株式会社春秋社、二〇一六年
- ・ 『浄土真宗聖典全書（三）宗祖篇 下』本願寺出版社、二〇一七年
- ・ 勸学寮 編集『親鸞聖人の教え』本願寺出版、二〇一七年
- ・ 小山聡子『浄土真宗とは何か』中公新書、二〇一七年
- ・ 小山聡子『親鸞の信仰と呪術 .. 病氣治療と臨終行儀』吉川弘文館、二〇一三年
- ・ 勸学寮 編『親鸞聖人の教え』本願寺出版、二〇一七年
- ・ 草野顕之『親鸞の伝記 『御伝鈔』の世界』東本願寺出版、二〇一八年

・浄土真宗本願寺派総合研究所 教学伝道研究室（聖典編纂担当）『浄土真宗聖典 御伝鈔 御俗姓 現代語版』本願寺出版社、二〇二〇年

論文

- ・西口順子「浄土願生者の苦惱」（古典遺産の会『往生伝の研究』新読書社、一九六八年）
- ・杉岡孝紀「法然上人に於ける三昧発得記の体験」（法然上人研究会『法然上人研究』第五号、一九九六年）
- ・清基秀紀「真宗の土着（一）―親鸞の著作に於ける神祇観の特徴―」（『印度學佛教學研究』三四卷二号、一九八六年）

「真宗の土着（二）―中世真宗に於ける神祇観―」（『三六卷二号、一九八八年）

「真宗の土着（三）―親鸞伝と六角堂夢告―」（『三八卷二号、一九九〇年）

「真宗の土着（四）―親鸞における観音と宗教体験―」（『四二卷二号、一九九二年）

「真宗の土着（五）―親鸞における仏と師―」（『四二卷二号、一九九四年）

「真宗の土着（六）―真宗における仏と師―」（『四四卷二号、一九九六年）

「真宗の土着（七）―妙好人における仏と師―」（『四六卷二号、一九九八年）